

このコーナーでは、この地域に伝わる民話を紹介し、皆さんからの感想画を募集しています。紹介する民話は、子どもたちに、ふるさとの伝説や昔話を教え、遠い祖先の心や、郷里のぬくもりを少しでも感じてほしいと、松浦市教育委員会が平成4年に再編した「松浦の民話」という本から引用した話です。

「わあ、すばらしいかあ、よかながめばい。」平次郎は、長男の茂作と長坂の峠に立つて、目の下に広がる江迎の海新田を眺め、思わず感嘆の声を上げていました。

「うしろ、わしも田ば作るぞ。」そう固く心に誓ったのは天保四年（一八三三年）、平次郎四十二歳の時のことでした。これは、今から百八十年ぐらいい前のお話です。

御厨田代村に、前田平次郎という人がいました。平次郎は、畑と山の持ち主、

## 松浦の民話②①

# 小島新田

のは、この長坂の峠での感激からでした。しかし、新田を作る仕事には、かなりのお金が必要でしたし、周りの人々の理解も必要でした。平次郎が決心してからすべて準備が整うまで、十年の年月が過ぎてしまいました。

いよいよ天保十四年（一八四三年）の春平次郎は、大崎村小島の浅い海を仕切って新田を作ることを決意し、大崎村の代官にこの計画を申し出ました。大崎村の代官里森常平は、藩の財政立て直しのためにも都合の良いことなので、この申し出を快く受け入れ、海新田を作ることを許しました。

平次郎は喜んで仕事にかかりましたが、周りの人みんなが味方とはいえず、平次郎をねたみ、仕事の邪魔をしようとする人もいました。ことに大崎村の林作は、その気持ちの

手として、近くの村々にその名を知られていました。しかし、平次郎は、一田を持たないや、本当の持ち手たあ言われんたい。」と、口癖のように言い、いつかきつと田の持ち手になってみせる、と自分に言い聞かせているのでした。

そのころの田代村には、小さな川沿いに細い帯のようになった、わずかな水田しかなかったのです。平次郎は若いころから、海新田作りに興味を持っていましたが、真剣に田を作ろうと決心した、

強い人でした。それというのも、以前に平次郎と林作が金持ち比べをした時、平次郎にはとてもかなわないことが分かり、それまで金持ちだと威張っていた林作の天狗の鼻が、へし折られたことがあったからです。それ以来、林作は平次郎を強くねたむようになり、今度の平次郎の大崎村への進出に対して、ますます苛立っていました。

「あそこや薬師様ちゅう御堂さんがあつて、あん辺は掘り返しよつたりや、いんま、ばちごま当たらうつだい...。」などと、村人たちに悪口を言っただけでもあり、誰も林作の口車に乗る者はいませんでした。

平次郎は、人夫を大崎村から、技術者を生月村から選び、工事の準備を着々と進めていきました。そして、天保十四年

（一八四三年）四月、小島薬師堂で地鎮祭が行われ、本格的な工事は八月から進められました。工事の合間にも今まで以上に働き、お金もたくさん集めました。

人夫たちにもきちんとお金を支払いましたから、みんな気持ちよく一生懸命働きました。工事は予定通り進み、完成も早まるのではなかと思われました。

ところが、年が明けて、年号も弘化元年（一八四四年）と改まり、工事も四分通り出来た六月のことです。連日、生ぬるい風が吹いていましたが、二十七日から天気が急に崩れ、強い雨、風になりました。工事は直ぐに中止され、人夫たちは急いで家に帰ってしまいました。平次郎はただ一人、風雨の中を吹き飛ばされそうになりながら、薬師の御堂に行き、中にこもって、ひたすら嵐の治まることを祈りました。

しかし、風雨は荒れ狂い、海へ流れ出る山水は満潮とぶつかり、工事場は泥水で覆われ、強い波で突堤も崩れ始めました。平次郎はまんじりともせずお堂に座り込み、ただ祈っていました。悪夢のような一夜が開けました。見ると、一年余りの年月をかけ、たくさんのお金と人力をつぎ込んだ仕事場は、無残な姿に変わっていました。

しかし、平次郎はくじけませんでした。「わしは、絶対に諦めんぞ。」

と、強く自分に言い聞かせるのでした。新田工事が水の泡になったことを、誰よりも喜んだのは林作でした。

ところが、平次郎がその苦しみを乗り越えて、再び立ち上がったことを聞き、一層平次郎をねたむようになりました。そして、ある日、林作はそっと工事場に忍び込み、突堤を崩せないものかと、下の砂地を掘ってみました。

その夜のことです。林作は怖い夢を見ました。長い突堤が音を立てて、自分の方に崩れてくるのです。次の夜も、また次の夜も、似たような夢を見てつなされ、体中に冷たい汗をにじませて苦しみまし

た。夢から覚めた林作は、「ああ、夢でよかった。こぎゃん大それたことは考えて...。本当なら遠島が追放になるころじやった。」

と、平次郎にすまない気持ちでいっばいになり、田代村の方を向いて手を合わせ、平次郎に謝るのでした。

さて、嵐で崩された突堤に、落胆の色を隠せなかった平次郎ですが、強い信念で立ち上がり、「正直じや、正直じや、わしは田ば作るぞ。」

と、再び工事に取り掛かったのです。その後、多くの苦難に遭いましたが、平次郎はくじけず、ついに弘化三年（一八四六年）八月、四年の年月を経て工事は完成しました。長い突堤が海水を完全にせき止め、待ち望んだ海新田が出来上がったのです。この海新田のことを、誰言うとなく「小島新田」と呼ぶようになりました。

海新田が出来上がった日、平次郎は石垣の中に一匹の犬を埋めました。これは、神への「いけにえ」のためでしたが、平次郎はあまり気が進みませんでした。村人たちはその当時の習慣として、生きた人間を埋めるべきだということで、一人の可愛い娘が選ばれていましたが、平次郎は、

「こぎゃんこた、やめたがよか。」

と取って取り合わず、娘の代わりに犬を埋めることになったのでした。娘の親たちはとても喜びましたが、その娘は十八歳で亡くなりました。村人たちは「いけにえから一度救われた、娘の短い命を不憫に思い、海新田を見下ろす小高い丘の上に、娘の墓を建てました。平次郎は、田を見回る度に娘の墓に参り、海新田を守ってもらうよう祈るのでした。

平次郎は六十九歳で亡くなりましたが、息子の平四郎は、父の仕事を偲ぶため、新田の北方に若宮神社を新たに祭りしました。その例祭は、今なお十一月十五日に行われています。（御厨町大崎）

中世の松浦 (36) 鷹島海底遺跡

長い間海底に埋もれていた遺物は、引き揚げてすぐには展示・公開ができません。そのままにしておく、腐食したり、塩分の結晶化に伴う変質、急激な乾燥による収縮・変形を起こします。また、長い間海底の土の中に埋まっている間にも過飽和に水を含んでいた、錆びて崩壊したり、発掘調査で海底から取り上げたことによる急激な環境変化で、より健全な遺物であつても急速な腐食の進行が心配されています。

特に金属製品の腐食は水と酸素により生じるため、新たな錆が発生して崩壊することもあります。そのため、これらの遺物は脱塩処理および保存処理をして未来へ残し伝えていかなければなりません。

教育委員会では船舶に関連した大椗おおいかなどの大型木製品、弩じゆ・弓など戦いに関連した木製品、櫛や椀などの生活に関連した木製品、冑・刀剣などの鉄製品、飾金具などの青銅製品の保存処理を行っています。

木製品の保存処理法としては、主にポリエチレングリコール含浸法(PEG含浸法)、真空凍結乾燥法、糖アルコール法などがあり、鷹島埋蔵文化財センターでは主にポリエチレングリコール含浸法を用いています。

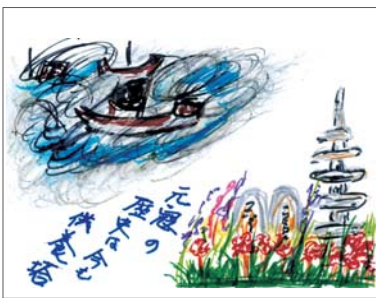


▲鷹島埋蔵文化財センターの保存処理装置

松浦の民話イラスト

読者の皆さんから寄せられたイラストの審査結果を以下の通りお知らせします。

先月の民話「元寇—神風がふく—」のイラストに、2通の応募がありました。ご応募ありがとうございました。



【最優秀賞】  
前田サツキさん  
(福島・日の浦、71)

「激しい嵐で荒れ狂う海に元の船団が翻弄される当時の様子だけではなく、当時をしのいで建てたという供養塔や五輪塔を描くことで、当時と今とをうまくつなげてある作品だと思います」 (はま)



【優秀賞】  
ペンネーム うさぎちゃん  
(志佐・里2、7)

「海を埋め尽くしていた多くの船が、嵐によって沈み、転覆を免れた船も裂けたり沈みかけたりして、前日の嵐のすさまじさが伝わってくる作品ですね」 (はま)

■あなたの力作を募集!

— 民話の感想画募集 —

右の民話を読んで感じた情景をイラストにして、必要事項を記入の上、左記まで持参、郵送またはメールにて送付してください。応募いただいたイラストは審査をし、上位のものを次の市報で紹介いたします。

【応募資格】住所、年齢、性別など何も問いません。ごなたでも応募できます。

【イラストの規格】はがきまたはA4サイズ以内の紙に絵の具やクレパスなどで書いたカラーのもの(色鉛筆の場合は濃く塗ってください)。

【必要事項】住所、氏名(ふりがな)、電話番号、年齢、職業(学校名)

※掲載する場合、ペンネームを希望する人は、ペンネームもご記入ください。

※はがきで応募される人は、必要事項を表の下部に記載してください。

なお、いただいた個人情報(民話コーナー以外には使用しません)。

【応募締切】11月11日(金)必着

【応募・問合せ先】

〒859-4598 松浦市志佐町里免365番地

松浦市まちづくり推進課 秘書広報係

☎0956-72-1111 Eメール=hisyo@city.matsura.lg.jp

※福島支所、鷹島支所、そのほかの各支所でも受け付けています。